

# 新・こどもと健康

No.2

2016.8.15

## 蚊の季節

夏真っ盛り、蚊に悩まされる季節ですね。蚊に噛まれると痒いですよね。痒みが出るしくみは完全には解明されていませんが、有力な説を紹介します。

刺すのは基本メスだけで、産卵前の栄養分を摂るために吸血します。まず蚊は鋸(のこぎり)歯状の顎で切り開いた皮膚から唾液を注入します。これは麻酔をかけて気づかれにくくするのと、吸った血液が固まらないようにするためです。この唾液成分に対するアレルギー反応が痒みの原因というのが通説です。

## 蚊にかまれたところをあまり搔くと、「とびひ」に

医学的には伝染性膿化疹(のうかしん)といいます。0～6歳くらいのお子さんにできやすく、虫さされや汗疹(あせも)などがかゆくて搔いた傷に、主に黄色ブドウ球菌が感染してできます。黄色ブドウ球菌は常在菌で特別な菌ではありません。傷口に入ると細菌が増え(膿んで)、毒素を作り、皮膚が破れてただれます。とびひもかゆみを伴い、そこを搔いた手で身体のどこかを触ると水ぶくれが全身にどんどんと広がります。あっという間に広がる様子が火事の飛び火と似ているため、とびひといわれています。治療は塗り薬の抗菌剤や、場合によっては飲み薬の抗菌剤やかゆみ止めを使用し、とびひの皮膚をガーゼや絆創膏で覆います。日本臨床皮膚科医会・日本小児皮膚科学会の統一見解ではとびひがあると治療が終わるまで、プールが禁止になります。

## 蚊が媒介する日本脳炎、予防接種の重要性

日本脳炎は、日本脳炎ウイルスを蚊が媒介することでうつります。6～16日の潜伏期間を経て、突然の高熱、頭痛、嘔吐などで発病し、意識障害や麻痺等の神経系の障害を引き起こす病気で、一旦発症すると特效薬はなく、20～40%が死亡、助かっても45～70%に重い後遺症が残る怖い病気です。ただ、日本脳炎ウイルスを持った蚊に刺されて感染しても、実際に発症するのは1000人に1人とされており、大多数は無症状に終わります。

日本脳炎の予防の中心は、蚊の対策(水たまりをなくす、刺されないような工夫)と予防接種です。予防接種に関しては、日本脳炎ワクチンが日本脳炎予防に有効なことは既に証明されており、ほとんどの日本脳炎患者は予防接種を受けていなかったことが判明しています。標準的接種年齢としては3歳から開始します。是非とも予防接種を受けましょう。

日本での日本脳炎患者は1966年の2017人をピークに、定期接種の普及によって、1992年以降は毎年10人以下になっていますが、日本小児科学会によると、最近の小児の報告で2006年に熊本県で3歳児、2009年に熊本県で7歳児と高知県で1歳児、2010年に山口県で6歳児、2011年に福岡県で10歳児、沖縄県で1歳児、2013年に兵庫県で5歳児、2015年に千葉県で11か月児がかかっています。

厚生労働省では毎年夏に、ブタの日本脳炎ウイルス抗体の獲得状況から、間接的に日本脳炎ウイルスの蔓延状況を調べています。それによると、毎夏日本脳炎ウイルスを持った蚊が発生しています。

日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会は、最近日本脳炎患者が発生した地域・ブタの日本脳炎抗体保有率が高い地域に居住する小児に対して、生後6か月から日本脳炎ワクチンの接種を開始することが奨励されるとしています（現在大阪府は当てはまりません）。

## 積極的勧奨を外れていた世代も日本脳炎ワクチンを忘れずに受けましょう。

日本脳炎ワクチンの定期接種の第1期は本来、生後90か月（7歳半）まで、第2期が9歳以上13歳未満ですが、平成17年5月から平成21年度までは積極的勧奨の差し控えがあったため、平成7年4月2日から平成19年4月1日生まれの方は、20歳未満まで定期接種の対象となっています。忘れずに受けましょう。

**10月1日からB型肝炎ワクチンが定期接種になる予定ですが、特に4～5月生まれの方は開始と同時に急ぐ必要性があります。**

新・こどもと健康のNo.1(2016.7.20号)をご覧ください。

## 内装工事終了のお知らせ

トイレの和式から洋式への改装と、待合室と診察室の間のドアの不具合の調整、自動ドアの巻き込み防止板の付け替えを行いました。

